
歌声

かざり凜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌声

【Nコード】

N2729N

【作者名】

かざり凜花

【あらすじ】

施設を出て流浪の生活を送っていたヒトミに、とつぜん自分を捨てた母の訃報が届く。
彼女の甘ったるい寂しさに焦点を当ててみました。

（前書き）

就職してからの初作品です。ずっと創作活動はしていたのですがスランプ続きで、これが再スタート第一作目となります。

心理学書で『子供は虐待されても捨てられても母を慕うものだ』ということを知ったことが書くキツカケになりました。最近の二人の幼子が家に閉じ込められて亡くなった事件にも少し影響されています。

綺麗な事になっていなければいいのですが……。

母が死んだ。夏の残り香が感傷を誘う初秋のことだ。報せてくれたのは、四歳から十八歳まで私を育ててくれた山下さんだった。

携帯電話が鳴ったとき、私はシティホテルの一室でぐったりとしているところだった。とても危険な目に遭って逃げ出してきたのだけれど、それらは全て自業自得だから仕方がないと思う。むしろ、こんな生活を続けていながら三年間も生き延びられていることが不思議だった。

私は公立高校を卒業すると同時に育った施設を出た。以来、きちんとした仕事も住所も持たないままホテルを転々とする生活を続けている。

ベッドにうつ伏せのまま、サイドテーブルの上の携帯電話へ手を伸ばす。疲労感は重く体にのしかかっていたけれど、ディスプレイに表示された山下さんの名前を確認すると、そんなものはどこかへ吹き飛んでしまった。

「もしもし、ヒトミちゃん？ 久しぶりねえ」

通話ボタンを押すと受話器からふわっと甘い声が広がった。開け放った窓から風が迷い込んでくる。私は仰向けになつて目を瞑った。懐かしい過去へ逃げ込むように。

その電話で初めて、母に家庭があることを知った。サラリーマンの夫と高校生の女の子が一人。女の子の年齢が自分よりも四歳年下だということを知り、私はすぐにその意味を理解した。それと同時に激しいめまいに襲われた。それでもなんとか平生を保っていたのは、山下さんの声があまりに温かかったからだと思う。山下さんの声はどうしても寂しい夜に飲むホットミルクに似ている。

「なんだ、そういうことだったのか」

私はそう言つて少し笑った。それが山下さんに自嘲的な印象しか与えないことをわかつていながら。それからしばらく重い沈黙が続

いた。

電話を切ったあと私は仰向けのまま窓の外を眺めていた。ベッドサイドの大きな窓からは満月が見えた。薄らと霧がかかった夜で、そよ風にのってミルクの香りが漂ってくるようだった。

気づいたら、鼻唄を口ずさんでいた。月は遠く、闇に溶けてしま
いそうだ。

小さな頃から、私は鼻唄を歌うのが好きだった。素直に感情を表現するのが苦手な子供だった私にとって、鼻歌は唯一とも言える自己表現手段だった。嬉しいときも、悲しいときも、不安なときも、気分がいいときも、だから私はたくさん鼻唄を歌った。

母親がお菓子を買ってくれたときは弾むように歌い、家に一人置き去りにされたときは自分を慰めるように歌い、初めて施設で迎えた夜には子守唄を歌いながら眠った。お酒に酔って笑いながら歌った夜もあった。なぜか、悲しいときが一番綺麗に歌えるのだった。

小学校三年生のとき、学校でいつものように鼻唄を口ずさんでいると、「ねえ、それ何ていう歌？」とクラスメイトに話しかけられた。私はそのとき、みんなは鼻唄にタイトルまでつけているのか、と大きな衝撃を受けた。当時の私は、鼻唄とはその場で適当に創り上げた唄を歌うことだと認識していたのだ。

それから、私は歌った鼻唄一つ一つにタイトルをつけるようになった。誰も知らない唄ばかり歌う私のことを、クラスみんなは小学生らしい純粹さで音楽に詳しいのだと思いついてくれた。私はすぐに自分の間違いに気づいたのだけれど、単純に自作の唄を歌い聴かせることが楽しくてやめられなかった。それで、次々に新しい唄を作ってはみんなの前で披露した。

「ねえねえヒトミちゃん。この間のアレ、『ホットミルク』また歌ってよ」などと言われる度にビクビクしたけれど、それ以上に喜びの方が大きかった。ヒトミちゃん、ヒトミちゃん、と親しげに名前を呼ばれる度に自分の名前を好きになれた。

思えば、あれが私の人生の短い全盛期だったように思う。

歌詞や歌手について尋ねられたり、同じ唄を歌ってと言われたりする度に「忘れた」と答える私を、彼らは次第に訝しいと感じるようになっていった。

知りたがり屋のマリちゃんは「ねえ、なんでいつも歌手の名前わからないの?」と不満そうな顔をし、お金持ちで自分のパソコンを与えられているユキコちゃんは「ヒトミちゃんが歌ってた唄、検索しても一つも出てこないんだけど」と冷たく言い放った。私はそれらに対して何一つ弁解の言葉を持ち合わせていなかった。そのことが、私がデタラメな唄を歌っていたという証明になってしまった。

“ウエムラの歌はデタラメ” “ウエムラは大嘘つき”
噂はあつという間に広がった。そして、私の周りから友達が消えた。

こちらから話しかけても、まるで私はそこに存在していないかのように扱われた。私はみんなの中で“空気”ということになったらしく、彼らはそれを半ば本気で信じ込んでいた。とても小学生らしい純粹さで。

私は寂しさを紛らわすため、休み時間は自分の席で一人歌い続けた。「あの子、また変なうた歌ってるー」女子の馬鹿にしたような笑い声が響き、男子も一緒になって騒ぎ立てた。皮肉にも、誰かに蔑まれていた間だけ私は存在を認められたのだ。

学校へ行くことは苦痛以外の何でもなかったけれど、そうしなかったのは山下さんに心配をかけたくなかったからだ。

私は一軒家で数人の同じような境遇の子供たちと暮らすグループホームというタイプの施設で育った。そこで職員として私たちの生活を支えてくれていたのが山下さんだった。山下さんは四十代の物腰の柔らかい女性で、私や他の二人のルームメイトが泣いていると真夏でも温かいホットミルクを作ってくれた。それを飲むとどんな悲しみでもじんわりと溶けていったが、山下さんはその度に申し訳なさそうな顔をするのだった。

教室にいることに耐え切れなくなった私は居場所を探しまわり、

やっとの思いでその場所を見つけ出した。

私が六年間を過ごした小学校は体育館が建物の二階に作られている。生徒は建物内の階段で二階へ上がるのだが、それとは別に屋外に非常階段が設置されていた。そこから体育館へ続く入り口は普段は閉鎖されていたので、非常階段を使用する生徒は一人もいなかった。その場所を見つけたとき、心底ホツとしたのを覚えている。

私はその日の気分で好きな高さを選んで階段に腰かけた。よく晴れた日は空に近いところを、天気の良い日は階段を上らずに、踊り場を屋根代わりにしてコンクリートの上に座り込むといった具合に。来る日も来る日も私はそこで歌い続けた。気分がのつたときには適当に歌詞をつけて歌うこともあった。当然、毎日歌う曲は変わったけれど、どれも悲しさのあまり口から零れ落ちたものであることには変わりなかった。

日を増すごとに悲しみは募っていく、それに比例するように歌声は澄んでいった。悲しければ悲しいほど歌は透明感を増すようだった。

やがて季節は移り変わり、本格的な冬がやってきた。夏の暑さは踊り場の影で暑さを凌げたけれど、寒さは服を着込む以外に防ぎようがなかった。それでも、みんなが楽しそうにしている教室で一人寂しく休み時間を過ごすよりはマシだと思えた。

真っ赤なコートにくるまり鼻水をすすりながら歌っていると、母に捨てられた夜のことを嫌でも思い出してしまった。コートは母が出て行く数日前に買い与えてくれたものだ。

季節は同じく冬。それも、雪でも降り出しそうなとても寒い日だった。物音で目を覚ますと隣で寝ているはずの母の姿がなく、玄関の方では人の気配がしていた。私が寝ぼけまなこでそこへ向かうと、母が慌ただしく家を出ようとしているところだった。後ろで一つに束ねられた髪に、真っ赤なトランクケース。トランクケースは当時の私が入れそうなくらい大きかった。それが、私の母に関する最後の記憶となった。

私が何かを口にする前に母は鍵を閉めて出て行ってしまった。裸のまま玄関に降りたけれど追いかけることはできなかった。ドアの鍵は縦に二つ並んでいて、私の小さな身長ではどうしても上の方のツマミを回すことができなかった。あと、たったの数センチ。それは同時に、めまいを覚えるほど果てしない数センチだった。

仕方なく私は玄関マットの上に座り込んで、再びドアが開くのを待った。それまでも母が夜遅くに出かけることはあったが、その日は何かが決定的に違った。例えば、いつものように「どうしても行かなきゃ、ごめんね」と言い訳じみたことを口にしなかったことに、私は子供ながらに違和感を覚えていた。

固く閉ざされた扉の前で私は途方に暮れた。悲しみはあとからじわりと湧いてきた。それで、私はその湧いてくる悲しみを歌った。涙とともにあふれ出してくる唄を、自分で歌いながらなんて悲しい音楽なのだろうと思った。寒さで全身が小刻みに震え、鼻水が止まらなかった。それでも私は歌うことをやめなかった。母が帰ってきますようにと祈りを込めて懸命に歌い続けた。

何時間か、それとも数分だったのか、あの頃の私には永遠にも等しい時間が流れた。空腹を覚えた私は食料を求めて台所へと向かった。豆電球の橙色の明かりに照らされたテーブルの上に、それまで目にしたこともないような大量のチョコレートが盛られていた。それで、私は全てを悟った。

今、私はストリートで一回きりの歌をうたって生きている。時折、誘われて行きずりの男と寝たりもする。大抵はお金との引き換えだけど、単純に寂しさを紛らわすただけに寝た夜もあった。

集金箱にはそれなりの小銭や食料が集まるけれど、生活費のほとんどは男たちと寝ること得ている。毎回違った男を相手にするの、今日のように危ない目に遭うことも多い。中にはそんな私の生活を案じて、あるいはそういうフリをして、愛人にならないかと言ってくる人もいた。けれど、何度も同じ相手と寝るくらいなら、いつそ殺されてしまった方がマシだと思う。

使い捨ての歌に使い捨ての体。それが私のスタンス。繰り返すことは死んでいることと同等だ。タンポポの種のようにあてもなく世界を漂っているときにだけ、私は自分が生きていることを実感できた。

当然、特定の恋人など作ろうと思ったこともない。友達も然り。それでも、三六五日ずっと強い女ではいられない。どうしようもなく寂しい夜もたくさんあった。そんな夜は、温かいホットミルクを飲みながら、寂しさに怯える必要はないのだと自分に言い聞かせた。物心ついた頃からずっと、寂しさは私のすぐそばに寄り添っていた。くれたのだからと。

あの人は新しい家族と幸せに過ごしていたのだろうか。寂しくない人生を送ってきたのだろうか。

『ねえ、ヒトミちゃん。自分を責める必要なんてなかったのよ、ずっと、ずっと、あなたそうしていたんでしょ』

山下さんの言葉が蘇る。しばらくの沈黙のあと、彼女は私にそう言ったのだ。

彼女の目に私はそんな風に映っていたのだろうか。薄いオペレーター越しの私しか知らないのだから、それでも不思議はないのかもしれない。それとも、自分で意識していなかっただけで私はずっと自分を責め続けていたのだろうか。自分を責めることで私の中の母の姿を守ろうとしていたとでも？

そこまで考えて、私は薄く笑った。

まさか。

だって、もうとっくに時効なのだから。

葬儀に顔を出すつもりはない。もう彼女のことを親とは思っていないし、新しい家族に不快な思いをさせてまでそうする意味もないからだ。

山下さんも私がそう答えることをわかっていたのだと思う。そのことを伝えると、「そうね、ヒトミちゃんならそう答えると思ったわ」と、穏やかに笑った。そういう人なのだ。私の人生にそっと手

を添えてくれるだけで、決してこちら側へ踏み込もうとはしない。それはとても甘ったるい寂しさを私に与えてくれる。一人ぼっちの台所で食べた、山盛りのチョココレートのような。

母親の記憶は遠く、窓から見える月のように朧だ。悲しみなどあるわけがない。かつて母だった人が死んだ。それだけのことなのだから。私のことを“ヒトミ”と呼んだ唯一の大人がいなくなっただけのことなのだから。

ただ、その日は眠りにつくまで歌い続けた。夜が濃くなって地球が冷えてくると、月はその輪郭をはつきりと映し出した。私の歌声は冴えた夜空にとてもよく響いた。

(後書き)

最後まで読んでくれて本当にありがとうございました。

批評はいい評価も悪い評価もありがたく受け取らせていただきます。どうか、一言でもいいので感想・批評・アドバイスなどお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2729n/>

歌声

2010年10月8日14時27分発行